



SOREGA KANOJO NO

それが彼女の

生存戦略!

—後編—

seizon senryaku

それが彼女の生存戦略！

（後編）

添牙いろは

流華りゅうかちゃんは何だかしっかりしたなあ、と茜あかねは服を脱ぎながら感心していた。学生として社会から学ばせてもらう立場から、支える側の社会人になったからかもしれない。同い年の自分はしっかりできているのかな？ と思いついてみると、少し自信がなくなってくる。

さつきも、茜は流華から怒られたところだ。

それは、宿泊の手続きの際のこと。茜は宿代を節約するためにも、三人同室で部屋を取ろうとしていた。彼は良からぬ乱暴をする人ではないし。

だが、それを知った流華から大目玉を喰らってしまったのである。

結局、男女別室で二部屋用意してもらうこととなった。茜も改めて考えてみると、自分は彼のことをよく知っているが、流華とワーグレックは初対面である。いきなり見知らぬ男の人と一夜を過ごせと言われれば怖がるのも無理もない。茜は自分の軽率さを反省していた。

とはいえ、裏を返せば二人に仲良くなってもらえば何の問題もない。そこで、茜は流華を連れて隣の部屋に遊びに行こうと画策していた。

しかし、彼女たちはこうして共同浴場にいる。茜から誘う前に、流華からひとつ風呂浴びてこよう、と逆に誘われてしまったのだ。この国でゆっくり浸かれる風呂は珍しい。なので、ここには温泉が湧いている、と聞いた時から茜も気になってお

り、つい流されてしまったのだ。

様々な思いを馳せながらチマチマと衣を解いていく茜とは対照的に、流華の脱ぎっぷりは潔い。ポポンと全裸になったところで、流華は友人から見つめられていることに気がついた。

「フフン、どうよ？ あたしも成長したもんだらう？」

ニカツと笑うと、二の腕に力こぶを作ってみせる。変わったのは心構えのことなだけでどなあ……と茜は苦笑い。その複雑な表情を見て、自信を失いかけているかと思つた流華は、茜の身体を両手でムニムニと励まし始めた。

「大丈夫さあ！ 茜だってイトコ成長してるじゃん？」

流華は腿やら腰やら胸に至るまで楽しげにマッサージ感覚で指を這わせている。こういうノリは学生の頃と変わってないなあ、と茜は少しだけ安心できるのだった。

へマルノスンの街は遠いため、この町のような中継地点に何箇所か寄ることになる。ここ、へモノツクルンもその一つだ。

温泉の名産地として有名で、この宿の大浴場は日帰り湯治客や地元民にも日常的に利用されている。そのため広いはずの浴室は芋洗いの様相を見せていた。

そんな人混みの中ではあるが、彼女たちは話題や言葉選びに気を使う必要はない。

誰に聞かれたとしても、彼女らの会話の内容を理解できる者はこの国には殆どいないのだから。勿論、物騒な話をするつもりもないが、二人きりのような気楽さはある。

「いやあく……使わなくなっても案外覚えてるもんだねえ」

元々学問は不得手な流華だが、すんなり故郷の言葉を口にできて少なからずホツとしたようだ。

「なあ、これってバイリンガル!? バイリンガルってヤツじゃないかい!」

湯船でバシヤバシヤと浮かれている流華を、茜はそつと窺める。周囲に言葉は通じなくとも、この盛り上がり方は些か恥ずかしい。

「こ、子供の頃に身につけた習慣は、そう簡単に忘れたりしないものだよ」

流華は自分が歩んできた剣の道を思い出して、幼い頃から武道を叩き込んでくれた母に感謝した。

が、隣の花はどうしても赤く見えてしまうものもある。

「それで英語ペラペラなのかい。あたしさあ……アンタのそういうとこに憧れてたんだよねえ」

肩をクイクイと擦り寄せてくる流華に、茜はちよつと照れてしまう。

「でも、こちらに飛ばされてきたら……知ってた言葉なんて何の役にも立たなかつ

たよ……」

母国語を含めて五ヶ国語を不自由なく操れる彼女だが、ここではそのすべてが通用しなかった。自分が生きてきた世界の狭さを思い知らされて、茜は少なからず落ち込んでしまふ。

暗い方向に流れそうになったのを察して、流華は慌てて話を変えた。

「ああ、いやっ、でもさっ、独りで生き延びられたのはスゲェと思うよ!? あたしなんてクラスみんながいたから何とかなっただけであってっ!」

「クラスのみんな……あっ、みんなはどうしてるんだろ!」

あの時、茜が、一番に教室を飛び出したのは救援を呼びに行くためだった。その目的も半ばにトラブルに巻き込まれ、助かったのは自分ひとり。さらに莫大な借金まで抱えては人助けなど叶いようもない。

メイド生活を送りながらも、彼女は度々クラスメイトたちのことを思い返していた。みんな無事で、それぞれ頑張っている——と信じていたが、それを知る人がいるなら教えて欲しい。

「おう! みんな元気にやってるよ。ま、大変なこともあったがね……」

茜がノックしてくれたので、流華は滔々と語り出す。苦楽を共にした女のこたちとの武勇伝の数々を。

「——で、一年ほど国中を回って、たまたまへロードグースまでやってきた、つてわけさあ！」

「みんなを纏めて村を興すなんて……やっぱり流華ちゃんは凄いよ！」

偶然親切な人に拾われた自分と異なり、一から集落を創り出した流華に、茜は心から敬意を評した。だからこそ、不思議なこともある。

「でも……どうして旅に出よう？」

そんな村だからこそ、思い入れは強いはず。友達もたくさんいるし。そんな大切な場所からあえて出ようとするには、それなりの目的がありそうなものだけど。

そもそも、流華が向かおうとしていたのはヘザッドルである。それなのに、茜がヘマルノスへ行き馬車を探している旨を伝えると、理由も聞かずに街の逆側にある馬車留まで走ってくれた。そして、強引に馬車を足止めして茜が来るのを待っていてくれただけでなく、自分も同行すると言い出したのである。

流華からの答えはその葉指に。湯船から出したその手には、チタン製の輪が嵌めこまれていた。学生の頃から竹刀を握ることの多かった流華が指輪をしているのは初めて見る。

「これはねえ……特別な思い出なんだよ」

流華はこの指輪の意味を語る。

これは、行方不明になったクラスメイトに贈ったものであること。

それを、魔物がつけていたこと。

ならば、ヤツらがやって来る先を突き止めることで、彼女の所在も判るかもしれないこと……。

それが、流華が村を出た理由だった。

「だから、ヘロードグースが空振りだと判ったなら、次の行き先はどこでも良かったんだよ。むしろ、ヘマルノスの魔術館とのコネが手に入るならメツケモンだわ」

彼女はヘロードグースの研究所を目当てにやってきた。だが、研究結果は部外秘の機密事項である。それじゃあ自分を採用しろ、と言い寄ったが女が就ける部署などない、と言われてキレた。

「番兵がああの程度の腕じゃあ、研究所の情報ってのも大したことなかるうよ」

流華は先ず門の前にいた二人を軽々と叩き伏せ、続いて取り押さえにやってきた三人の警備兵も返り討ちにしてしまった。

寄って掛かって女ひとりに負けたなどと喧伝されては施設の面目が潰されてしま

う。そこで、狼藉について上には報告しないので、このことは他言しないで欲しい、と取引を持ちかけられたのだった。

彼女はもうここに協力を仰ぐ気はなかったし、国全体を敵に回すのも得策ではない。既に興味を失っていた彼女は先方の意向に応じたのである。

もつとも、流華は早速約束を反故にして、こうして茜に喋っているのだけでも「き……聞かなかったことにした方が……いいのかな？」

こんな大事件にも関わらず、茜はワーグレックからこの話を聞いていない。彼が律儀に緘口令を守っているのに、流華本人がバラしては台無しだ。

「んなこと気にすんなってー。アイツらが弱いのが悪イんだ」

直接手合わせはしていないものの、ワーグレックも研究所の一員である。このように軽く見られては、茜は内心面白くない。

「……だったら、ワーグレックも同室にすれば良かったのに」

不貞腐れて、つい本音が出てしまった。

せっかく彼と一緒にの旅路なのに、別々の部屋に隔離されてはつまらない。

怖くないなら一つの部屋でも良かったのに……と茜は思う。

だが、流華にとつて、部屋割りの件は彼女が強いだのワーグレックが弱いだの、そういう問題ではない。茜の危うさに対して、流華は再び指導する。

「ハア!? あたしは平気だよ? 襲われたら根っこから引き千切ってやつからさ。でも、茜はそうもいかんでしょ?」

「おそっ……ふええ!?!」

茜は言われて、今更ながらワーグレックに唇を奪われたことを思い出してしまった。そして、恥ずかしくなるような直球で想いをぶつけられたことも。

どうりで馬車での彼がいつも以上に静かだと思った! いきなり懐かしい友人と再会して浮かれていたけど……アレは私たちの思い出話に入れなかったんじゃない。恥ずかしくて口が利けなかっただけなんだ!

「ちよっ……何? 何だい、その反応!?!」

流華の方は、茜が根っこの方に恥じているのかと些か慌ててしまう。ガキじゃあるまいし、そんなところに食いつかれてはこっちが困る。

狼狽が狼狽を呼び、茜の方もすっかり茹で上がってしまった。もしかして、ワーグレックに襲われ済なの勘付かれた……!?!

「えっ、ワーグレックとはこっちに来た時から一緒に住んでたけど変なことはなかったよ!?!」

「あの男と!?! 一つ屋根の下で!?!」

それを聞いて、何故だか怒り出してしまった流華を茜は必死に窘める。このまま

じゃ、ワーグレックの根っこが引き千切られちゃう！

「落ち着いて聞いて！　ワーグレックは、私の命の恩人なの!!」

今度は、茜が自分の身の上を話し始める。

狼の群れから助けてもらったこと。

その際に積み荷を燃やしてしまったこと。

そして、着る服、住む場所、更には食べるものも分けてくれて、仕事まで探してくれたこと……。

彼がいなければ自分の命はなかったのだ、と感動巨編を語り尽くしてみるも、流華の関心は下世話なところに向いていた。

「なあ、布団はどうしたん？」

「ひえっ!？」

当然、彼女が泊まっていた間、彼はずっと椅子で寝ていたわけではない。これについては彼女の知らないところでワーグレックの気苦労があったようだ。

最初は一人でベッドを占拠していたアカネも、二日目ともなればさすがに甘える

のも申し訳なくなってくる。それで、その晩は椅子とベッドを交代しようとは提案してみた。しかし、ワーグレックは頑として受け入れようとしなない。

「ダメですー！　ここはワーグレックのイエ！　ベッドも、ワーグレックの！」

「うるせえ。俺は椅子で充分なんだ」

「なら、ワタシはユカでネます！」

駄々っ子のように床にうつ伏せになるアカネを無理矢理ベッドに放り込んでやろうとしたものの、彼は彼女に指一本触れることができない。こんなことなら、店員に勧められるままに薄手のネグリジェなど買うべきではなかった。彼女の滑らかなお尻の膨らみに頬を赤らめながら、彼はしこたま後悔する。アカネの身体はどこをとつても柔らかかそうで、担ぐことなどできそうもない。

お互いのつぴきならなくなったところでしばしの膠着状態。だが、ここでアカネは突如顔をもたげ、素っ頓狂な声を上げた。

「あつ、もしかして」

勢いよく飛び起きると、ベッドの奥の方に横たわる。そして、手前側を指してポンポンと布団を叩き始めた。

「このベッドはヒロイです。フタリでネれます！」

私って頭いい！　と言わんばかりにドヤ顔をキメるアカネだったが……

「バツ……バツカじゃねエの!？」

恥ずかしさのあまり、ワーグレックは彼女に背を向けた。

「バカじゃないですつ！ ゼツタイにネれますー！」

ベッドから下りて駆け寄ってきたアカネに後ろから手をグイグイと引かれる。

しかし……

こんな誘惑に応じることなどできるわけがない！

「ナニ考えてんだ！ 俺は……俺は男なんだぞ!？ その……間違いが起こったら

どうすんだ！」

強引に手を振り払われたアカネだったが、すぐさまその手を握り直す。

「でも、ワーグレックはマチガえないですよ？」

こんなことで間違えるくらいなら、とつくに間違いを起こしているだろう。男を

見る目に自負のあるアカネはすっかり安心しきっていた。

彼も彼で、彼女からの信頼を裏切れない。ここで彼女の誘いを跳ね除けることは、

彼女の想いをすべて否定することに他ならないのだから。

ワーグレックは自分の身の潔白を証明するため、彼女と同じ布団に入った。確か

に、広さは申し分ない。

「ほら、ネれた！ それでは、オヤスマイナサイ」

これでワーグレックにも迷惑をかけずにゆっくり休める……と、アカネは満足して寝入ってゆく。しかし、その隣人の心中は、満足とは程遠いものだった。

(ね……眠れん……！)

無論、彼は眠っている彼女に良からぬ悪戯を企むような男ではない。

だが、無欲でもない。

自らを強く律し、年頃の男子らしさを我慢しているだけだった。

無防備に伏せられた睫毛も、接吻を請うような唇も、静かに胸を上下させる吐息も、すべてが狂おしいほどに愛らしい。

その上――

「ん……うん……」

悩ましがな呟きと共に寝返りを打たれては口から心臓がはみ出してしまふ。彼は睡眠を摂るどころではなく、自らの理性で煩惱を抑えるのが精一杯だった。

どうせ眠れないのならば……！

彼は布団から這い出し、深夜の自主トレーニングを開始する。

肩を鍛え、足を鍛え、疲労から眠気が来るまで訓練用の模擬刀を振り続けた。

(まだか……まだ眠くならんのか……！)

特訓の成果が現れて、ようやく無心で眠れそうだ……と布団に入るが、もう窓の

外から陽が射し始めている。日の出と共に目を覚ます習慣も虚しく、彼は床の中で鐘の音を迎えた。

仕事に向かうと聞いていた二の鐘が鳴っても、ワーグレックは目を覚まさない。そんな彼を心配したアカネによって、ようやく彼は揺り起こされた。

「ゴメンナサイ。ネニクかったですか？」

（寝難いどころじゃねえよ！）

そんな悪態を吐きたいところだが、邪な下心を抱いた所為で寝付けなかった、などとは言えようもない。

ワーグレックは、彼女ひとりをベッドで寝かす方法はないものかと頭を悩ませるのだった……。

意識していなかった頃は意識していなかったが、今となってはワーグレックの気持ちが茜にもよく解る。どうして彼が毎晩寝る前にあんなに激しいトレーニングや素振りをしていたのかも。

もし、今あのような状況になったら、絶対に期待してしまうだろう。昨日の夕方、

裏門の前でされたようなことを——

「そつ、それでも変なことにならなかつたんだから、ワーグレックはいい人なの！私を守ってくれたの！　お願い解つて!!」

少なくとも、同棲中は頼り甲斐のある兄のように慕っていた。今から思えばお互い相手を見る目は少しずつ変わっていた気もするけれど。でも、昨日まではそこま得意識することはなかったし。

茜は頬を赤らめて必死に弁解している。その様子を見て、流華は——このコも今になって自分がとんでもなく危険な状況にいたことに気付いたのか？　と少しだけ安心した。

「んー……まー……これからはあたしが護つてやつからさ、安心していいんだぜ？」
そういつて脱衣所と同じように流華は茜の肢体に絡み始める。変な触り方だけど、これで誤魔化せるなら……と半笑いの茜はされるがままになっていた。

その後も三人の旅はつつがなく続いてゆく。リユーカーに煽られたことで、アカネもワーグレックを気にせずにはいられなくなってしまった。こうなつては、もう同じ部屋に泊まりたい、など言えようもない。

もっと彼と仲良くお喋りしたいのに、どこまで仲良くしていいか判らずつい距離

を取ってしまった。こんなことで悩むのは初めてで、アカネは戸惑いを隠せない。そんな煮え切らない三日間の旅程を経て、彼女らは目的地であるへマルノスの街に到着した。

外壁から入ってすぐの馬車留で降りると、そこから真っ直ぐに大通りが走っている。そしてその突き当りに鎮座しているのが、アズムルフ魔術館だ。観光名所にもなっているだけに、とても判りやすい。

アポイントを取っているワグレットクを先頭に、三人は街の中央通りを闊歩していく。ここは魔術館にちなんで魔術関係の珍しい土産物が多いため、アカネはついフラフラと露店に吸い寄せられてしまう。その度にリユーカに襟首を引っ張られ、辛うじて寄り道することなく目的地に到着できた。

正門は広く開け放たれ、番兵などは置かれていない。そのまま敷地に足を踏み入れたところで、そこからスツとアカネが二人の前に先行する。そして、巨大な玄関扉に備え付けられたノッカーを手に取り、コンコン、と二度ほど敲いた。

「……アカネ？」

彼女らしからぬ流れるような動きに、リユーカは首を傾げる。ワグレットクも、最初は呆気にとられていたが、彼女の服装から、その行動の意味を理解した。

「アカネ……お前はもうメイドじゃないんだぞ？」

「……あつ」

大きな館を前にして、つい今までの癖が出てしまったようだ。着の身着のまま彼を追ってきた彼女はこの服しか持っておらず、傍からは剣士たちの従者にしか見えない。

「おい、アンタ、アカネをパシリに使おうってなら容赦しないよ」

「するワケねえだろ」

二人の間に険悪な雰囲気漂い始める。が、すぐに中から人が出てきたことで、この場は一先ず収められた。

扉の隙間から赤茶けたローブをすっぽり被った少年が大人たちを見上げている。まだ修行を始めて間もない新入りだろうか。その真新しい制服には皺もほつれも見当たらない。

相手が子供であっても、ワーグレックは組織人としての礼儀正しく名乗りを上げる。

「へ王宮異生物調査団のワーグレックと申します。本日、アズムルフ八世殿との面会をお約束しているのですが」

「ああ、はい。伺っております。どうぞお入りください」

連れられて中に入ると、重々しい外観からは想像できないほどに中は明るい。高

く吹き抜けたロビーに光を取り入れる窓が数多く空いているためだろう。そんな中央階段を上りながら、ワーグレックは少年にこの館に休憩室はあるかと尋ねた。

「面会の間、彼女たちが寛げる部屋を用意して欲しいのだが」

二人は同席して話を聞くつもりだったので、彼の言い分には大層驚かされた。こんな時、真っ先に食って掛かるのは、やはりリユーカである。

「おい、アンタ、そいつアどういう見だい？」

問答無用で拳を振り上げそうな彼女をアカネは慌てて押し留める。

「リユ、リユーカちゃん落ち着いて！ あのコ怯えてるよ？」

この魔術館ではネチネチとした舌戦はあっても、いきなり腕力に訴えるような争いは珍しい。慣れない荒事に、少年は縮み上がっている。

しかし、これはワーグレック個人の問題ではない。組織の一員として行動している以上、そこでの規則には従う義務がある。

「これから話すことには機密情報が多く含まれる。部外者を立ち会わせるわけにはいかん」

部外者……：そう言われて、アカネは酷く落ち込む。それならいっそ、ワーグレックのメイドとして雇って欲しい。そうすれば、自分も彼と同じになれるのに。

そんな短絡的なことを考えていたアカネだが、リユーカはより短絡的だった。そ

ういう事情なら、やりようはいくらでもあるんだぜ？ と口元に不敵な笑みを浮かばせる。

「じゃあ、アンタとは無関係に、あたしたちがその魔術師様から直接話を聞く分には問題ねえんだな？」

「たち!？」

アカネは問答無用でリユーカ側に取り込まれてしまった。肩をぐいっと抱き寄せられて、完全にワーグレットクと敵対させられている。

「それなら何の問題もない。好きにしろ」

彼はそれだけ言うと、ため息混じりに小さなローブの肩を叩く。それで少年も、問題は解決したのかな、と部屋までの案内を再開した。

その間、リユーカの脳内で物騒な計画が組み立てられてゆく。ご高名な魔術師先生なのだから、きつと最上階のド派手な扉の奥でふんぞり返っているんだろう。完全に、リユーカは相手を呑んでかかっていた。そんなジジイが相手なら一瞬の隙に間合いを詰めて刀を抜けばビビってこちらに従うだろう。

そんな彼女の思惑とは裏腹に、少年が足を止めた扉は他と見分けがつかないほど地味なものだった。

意外と謙虚な相手なら、きちんと話してみるのも悪くないか。それでもダメなら

殴ればよい。彼女なりに控えめな方針に轉換されたが、それすらもすぐに更なる再検討を余儀なくされた。

少年はコンコン、と二度ノックして、扉の向こうに呼び掛ける。

「へ八世、お客様です」

「へ八世はやめて。まだその名は継いでいないわ」

中から応える声は、明らかに女性。それも、まだ若い。これにはリユーカは面を食らわされた。

相手が男なら老人から子供まで平等に容赦ない彼女だが、女は護るべき対象である。手を上げるなどもつての外だ。

それも、魔術師というくらいだからきつと知恵も回るのだろう。自分ごときで説得できるのだろうか。相手の性別が判った途端、リユーカは弱気になってしまった。対応策も思いつかないまま、内側から扉が開かれる。中から現れたのは、アカネよりも更に小柄な少女だった。

——可愛い！

頼み事のこと忘れて、リユーカは瞳を輝かせる。

無愛想でニコリともしないけれど、幼気な身体つきも合わせて容姿についてはドストライクだ。

パツツンな前髪が日本人形のようだけど、ゴスロリとかも似合いそう！
むしろ、アカネとお揃いのメイド服を着せてみたい！

きつと、朗らかなアカネと対になって、姉妹みたいによく映えるだろう！！
ひとり盛り上がっているリユーカを他所に、周囲は淡々と話を進めていく。

「へ王宮異生物調査団へより参りましたワーグレックと申します」

小柄な少女に恭しく頭を下げる彼に対し、へ八世へは視線で一瞥するのみ。

「へアズムルフ魔術館へのクロエよ。専門は水と空間魔術。よろしく」

だがこの時――

突如、天啓がアカネを打ち付ける！

「うば子ちゃん！」

ビキリ。

ワーグレックを部屋へと案内しようとしていたクロエのこめかみに血管が浮き上がる。そして魔術師とは思えない手の速さでアカネの腕を掴むと、自分の個室へと引きずり込んでしまった。

そして、中からガシャリと鍵をかけ……不躰な女に向かって大魔導師はキツと睨

みを利かせる。

「貴女……朱鷺とぎのうちあかねノ内茜あかねね……！」

こんの……天然女が……ッ！

別世界に来てまで不倶戴天の敵と遭遇するとは……煮え湯を飲まされるとはまさにこのことか！

と激憤に燃えるクロエにも気づかず、茜は旧友との再会を喜んでいる。

「やっぱり、黒柄くろえうば子ちゃんだ！ 久し振りだね。雰囲気変わってて最初判らなかつたよ」

ニコニコと微笑む茜の胸ぐらを両手で掴み、念を押すように睨みつける。

「ク・ロ・エ」

「う、うん。覚えてるよ。同じクラスだった黒柄う——」

「クロエ！」

何やら二人の間で呼び名のイントネーションが若干ズレている。

「私はクロエ。もう昔の名前で呼ばないで！」

何を怒っているのか解らないが、ともかく、茜字で呼んで欲しいのかな、と茜にもようやく伝わった。でも、下の名で呼び慣れた彼女には、どうも堅苦しく感じられる。

「うば子って可愛い名前だと思っけどな。愛嬌あつて」

「どこがよ!？」

クロエの両親の話によると娘が産まれた土地から名前を貰ったそうだ。しかし、これは一生を左右する問題である。何故もう少し慎重にならなかつたのか、と彼女はわりと真剣に両親を恨んでいた。

それに引き換え、クロエ、という名は素晴らしい。物静かで鋭利な響きが、独り魔導の道を目指す自分にピッタリではないか。

クロエはウバコという名は捨てた。先にも後にも、クロエはクロエなのである。

「ク……クロエちゃん、って呼べばいい？」

「ちゃんもいらぬ。クロエ、と呼びなさい」

強気な口調とは裏腹に、瞳は涙ぐんでいる。もはや自分の沽券を守り切るのでギリギリのようだ。

ひよつとして——とても悪いことをしてしまったのかも……？ 茜は、クロエの気の済むようにすることにした。

「ご、ごめんね。クロエ。だから、もう泣かないで」

「泣いてないっ!」

クロエは学生の頃からずっとアカネが嫌いだった。いつもマイペースで、知らず

知らずのうちにもこちらに溶け込んでくる。そして、いつの間にか相手のペースに振り回されてしまうのだ。

「く……屈辱……!!」

「あつ、『屈辱』ってうば子ちゃんの決め台詞だよな？　こー……眉間に皺を寄せ
て——」

「だから、うば子って呼ぶな!!」

もうダメだ。

この女に付き合っていたら自分を保てない。

訪ねてきた用件を聞いて、早々に引き取ってもらうしかなさそうだ。

しかし……

その目的を聞いて、クロエは心底嫌そうに顔をしかめる。こばやもとりゅうか小早本流華からの相談に乗って欲しい、ということとなると、また余計な時間を食ってしまう。

「この廊下を奥に向かえば応接室があるから、そこで待つてなさい」

そう言つて茜を部屋から追い出すと、入れ替わりでワーグレックを迎え入れる。外に残された女子ふたりはやることもないので、言われたとおりに向かつてみることにした。

三つほど扉を過ぎたところで、やや大きめな扉の上に掲げられた札に記されてい

るのは『応接室』。ここで間違いなさそうだ。

中には二人がけの長椅子が重々しいセンターテーブルを両脇から挟みこむように並んでいる。彼女らはそこに向い合ってゆったりと座って待つことにした。

難なく自分らの面会の約束も取り付けられた流華だったが、その面持ちは心なしか重い。

「どしたの？ 折角うば子ちゃんとも再会できたのに」

「ああ、うん、そだねー……」

年下の美少女が現れたと思ったら、よりによってあの黒柄うば子とは……！

「まー……ナンだ。あたしや、あのコがどーも苦手だねー……」

「ふーん、流華ちゃんって女のコ大好き！ ……だと思っただけ」

「あつ、あたしだって相手は選ばア！」

流華の好みは茜のような護ってあげたくなる娘だ。

一方の黒柄は口数が少なくて何を考えているか解らない上、ひとたび口を開けば毒ばかり吐く。

そんな彼女に相談事など、自ら煮えたぎる油壺に飛び込むようなものだ。相手が彼女だと判ってからというものの、流華はすべてを茜に押し付けて逃げたい気持ちでいっぱいだった。

そんな不安も長らく続けば、次第に苛立ちへと変わってくる。

この国に機械仕掛けの時計はないので、正確な時刻は判らない。しかし、外から昼食時を告げる鐘が二回打ち鳴らされると、流華の空腹感は耐え難いものになってきた。

「茜っ、あたしや飯食ってくるよ。黒柄が来たら話聞いといて」

席から立ち上がって出ていこうとする流華に、茜は必死に食い下がる。

「待つて！ 私じゃ何訊いていいかわかんないし！」

そこに更にもう一つの声加わった。

「無責任ね。話を聞きたいのは貴女じゃなかったかしら？」

ハツとして二人は流華が座っていた席に振り向く。

そこには――

「待たせたわね。ワーグレック殿にはこちらで用意した宿に向かってもらったから心配しなくていいわよ」

流華が席を立った一瞬に、その椅子はクロエに奪われてしまった。白いローブに着替えた彼女は、さも最初からそこにいたかのように堂々と寛いでいる。

「バカなっ!! あたしが後ろを……!!」

それどころか、部屋に入ってきた気配すらなかった。

「自己紹介はしたわよね？ 私の専攻は空間魔術だって」

武道の嗜みのある流華はいとも簡単に背後を取られたことにショックを隠し切れない。もし、ここが戦場だったら確実に殺されていただろう。

これぞまさしく、理想的な反応。クロエはすまし顔の裏側で盛大に勝ち誇っていた。これで、さっきの失態も返上できたはず。散々ナメた態度を取っていた朱鷺ノ内茜とて、これで大人しくなるだろう。

その憶測どおり、茜は驚きのあまり放心していた。が、それは黒柄の思惑とは少し異なり——真後ろを取ることができた流華と違い、茜に対してはやや角度が悪かった。

「うば子ちゃんっ、いまストップンだったよね!？」

「なっ……!？」

「えええっ!？」

絶句するクロエに続いて、流華もどこか嬉しそうな悲鳴を上げる。

「そっ、そんなワケないでしょ！ バカなこと言わないで！」

狼狽えながらも否定するクロエだが、茜もバカ呼ばわりされては引き下がれない。

「バカじゃないもん！ おっぱいの間にすっごい模様入れてたでしょ!？ 私見たもん！」

自分の胸を手の平一杯に掴み込み、左右にグイグイと広げる茜。その仕草は些か間抜けだが、表情は真剣そのものである。

クロエは、己の計算の甘さを死ぬほど呪った。あの位置取りならリユーカを壁にして誤魔化せると思ったのに……なんて目ざとい！ 部屋の中は女子だけだから——と派手な登場なんてカマすんじゃないかった！

「ナンだって!? 頼む、黒柄！ もう一度だけ！ 今度は見逃さないからっ!!」
「ナニをよ!?!」

相変わらずだな、こっちの女も！

あの瞬間を狙われては、そう易々と秘術を披露するわけにもいかない。

「屈辱……!!」

またしてもこの女の所為ですべてが台無しだ！ 来て早々だが、廊下に飛び出して一からやり直したいほどに、クロエは後悔させられていた。

胸の魔法陣を見られては誤魔化しようもない。彼女は全面的に茜の言い分を認めた。空間転移魔法の『特性』についても説明し、そう気軽には使えないことも納得してもらえたようだ。

そして、ようやく会谈開始。議題は、これまでどうやって生き抜いてきたかと、

二人がここに来た理由について。

「ふうん……？ リューカは魔物が来る先を知りたい、アカネは何となく男にくっついて来た、ってことね」

長椅子に並んで座る兩名からひと通り話を聞き終わると、クロエは楽しそうに目を細める。

「てつきり元の世界に帰る手立てを探しに来たのかと思つてたけど……そういうことなら協力してあげる」

「帰れるの？」か!？」

思いもよらない一言に、聞き手ふたりは声を揃えて聞き返した。

折角驚いてもらえたところだが……残念ながらこれに自信を持った答えは返せない。

「いえ……でも、その道筋は見つかっているわ」

彼女には別段隠すつもりもないので、簡単に説明することにした。

この世界では、各地で異世界への扉が開くことがある。が、その行き先は様々で、元の世界に通じているかは判らない。

さらに、いつ、どこで開くのかも判らない。

クロエはその法則性を調査し、時期と場所、そして行き先を予測しようとしてい

るようだ。

「そつかあ……帰れるんだあ……！」

茜は今でも時折夢に見る。数年前まで暮らしていた懐かしい世界のことを。

そんな彼女に、クロエは冷徹に言い放つ。

「貴女が帰りたいなら止めないけど、私は帰るつもりはないから」

これには、茜だけでなく流華も驚かされた。

「嘘だろ!? じゃあ、何で帰り道なんて探してるんだよ？」

確かに、皆ここでの生活にも慣れて、随分馴染んできたところはある。だが、生まれ故郷では両親や友人たちがいなくなつた者たちを心配していることだろう。それを差し置いて、あえて帰るといふ選択肢を捨てるなど、彼女ら二人には考えられない。

「私が目指しているのは魔力の根源。元の世界への帰路は、あくまでその副産物よ。私はこの世界のために学を修めて、この世界を守るために生きるよと決めたの」

クロエは複雑な理屈は省いて、異世界への扉の説明に補足していく。

その先が地球とは限らない——とは言つたが、実のところ、魔術師にとってそんな世界など眼中にない。彼女らが目指しているのは、まったく別の——へ魔界へと呼ばれる場所である。魔力が溢れ出す根源の地と考えられており、そこに辿り着け

れば、魔術の本質に迫ることができらるだろう。

突如現れるようになった魔物たちも、**「魔界」**からやって来ているようだ——その推測に、流華は眼の色を変える。

「つまり、アイツは**「魔界」**に連れ去られたかもしれねエってことか……！」

左手の指輪を見つめながら、決意を固める流華だったが、そんな彼女を見つめるクロエの視線は冷たい。

「水を差すようで悪いけど、次の調査は**「ヒローム」**よ」

「**「ヒローム」**……！」

クロエの提案に対して、両者の声色はまったく異なる。嬉しそうに目を瞬かせる茜に対して、苦々しく口元を歪める流華。そんな彼女の反応を見て、茜は首を傾げる。

「アレ？ **「ヒローム」**って流華ちゃんの村だよ？ みんなとも会えるし、私も見てみたいな。……流華ちゃんは楽しめないの？」

茜は、流華にとつての**「ヒローム」**は、自分にとつての**「ロードグース」**のような場所だと思っていた。しかし、流華の表情には冴えがない。

「そ、そーだなあ。楽しみではあるんだが……ははは……」

「……逃げてきたんでしょ？」

煮え切らない流華の心情を、クロエは容赦なく抉り抜く。

「ふえ？」

固まって声も出せない流華に代わり、茜が疑問を口にした。

「逃げた？ 何から？ え？ え？」

彼女が凶星を突かれたことは、茜の目にも明らかだ。しかし、その原因には見当もつかない。

そんな茜に、クロエは流華の本音を代弁していく。本人の許可も取らないままに。「女のコが男たちと力を合わせて村を守り切ったのを見て、自分の居場所は無くなつた——そう感じたのでしょ？ それでひとり村を——」

「違エよ!!」

言いたい放題言われて、流華は黙っていられない。勢いよく立ち上がって座ったままのクロエを睨みつける。が、その視線にはいつになく弱々しい。

「あたしはただ、アイツのことが心配で——」

「アテもないのに旅に出たの？ 目の前の女のコたちを置き去りにして。そんなことができるキャラじゃないでしょ？ 貴女」

これについては、茜も少しだけ引っかかっていた。とはいえ、素直な彼女は疑うことを知らない。それだけその友達のことを大切なんだなあ、と額面通りに受け取

っていた。

しかし、クロエはそこまで単純ではない。

「貴女にとって本来敵は外から来るだけじゃない。村の内側からも守りたかった。そうよね？」

流華のように男を嫌悪の対象としない茜には、クロエが言う内側の敵が何なのか解らない。が、その疑問は埋められることなく、クロエは項垂れたままの流華に言葉を続けていく。

「でも、肝心の彼女たちが貴女からの庇護を求めていなかった。それが悔しくて村を出た……そうよね？」

流華は何も言えない。彼女の指輪が気掛かりだったのは本当だ。

しかし……

男と女が手を取り合って仲睦まじく喜び合う姿は、彼女にとって敗北以外の何物でもなかった。流華は、彼女たちが男などに頼らずに生きていけるよう頑張ってきたつもりだったのに、結局、すべては無駄だったのだから。

彼女は、男に村を乗っ取られてしまった、と失望していた。その寂しさが、指輪の主を探すことを求めさせたのである。

「う……チクショウ……！」

力なく腰を下ろし、目元を掴んで震えている流華。何故こんなに苦しんでいるのか、茜には解らない。だから、彼女にできるのは、何も言わずにか弱い女の口を抱きしめることだけ。

「茜……茜え……」

その温もりさえあれば、今の流華には充分だった。涙を受け止めてくる場所があるだけで、彼女の悲しみは和らげられる。

張っていた気力がみるみる窄み、流華はすっかり小さくなってしまった。彼女の頭を撫でながら、茜は憂いを帯びた瞳でクロエに問い掛ける。

「ねえ、クロエ。どうしてもヘイロームでないとダメなの……?」

流華は思っていたより憔悴しているようだが、クロエの意思は変わらない。

「ええ。あの土地は特別。何かに誘われるように魔物たちが集まってくる。だから、行き先を変えるなんてあり得ない。申し訳ないけど、私は誰かさんと違ってアテもなく放浪しているほど暇じゃないから」

チクリと流華を皮肉るクロエに、茜は頬を膨らませて抗議する。クロエも……少し言い過ぎたか、と自戒した。

「別に無理してついでこなくてもいいけど……どうする?」

これ以上苦しめる必要もないだろう。クロエは流華にリタイアを勧める。だが、

流華にも意地があった。

「……行くよ。こんなことで逃げてたら、アイツを助けることなんてできやしねえ」
そう呟いて茜の胸から顔を上げた流華の目に、もう涙はない。しかし、決心がついているともいえないようだ。

そんな彼女を後押しするために、茜はパンツと柏手を叩く。それは重く煮え切らない空気を払拭するためでもあった。

「じゃっ、お昼ご飯食べに行こっ！ 私、お腹空いちやった」

彼女の笑顔は周囲を明るくしてくれる。こんな調子じゃ情けねえ、と流華も空元気を振り絞って立ち上がった。

「よっし、肉食おうぜ、肉！ 肉食えば元気も出るってもんだ」

この流華の奮起に、嬉しくなった茜もすかさず同調する。

「あ、ここに来る大通りでハンバーグのお店見かけたんだ。そこにしようよ。クロエもハンバーグ好きだったよね」

「勝手に決めないで！ 私はそういうキャラじゃ——」

何より、あの大衆食堂は昼間から安酒呑みのガラの悪い連中の集まってくるような店だ。仮にもこの街一番の大魔術師の跡継ぎともあろう者が立ち寄るべき場所ではない。

しかし、聞く耳を持たない二人に引っ張られては頑なに拒む方が恥ずかしくなってくる。

せめて知り合いに会いませんように……と祈りながら、久方ぶりの好物を味わうことにした。

正義の投与の行く末は
いじめられっ子の処方箋

添牙いろは

イジメ撲滅運動——

とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。

しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？

そんな疑問に突き当たる。

悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？

そして、運動を取り仕切る

学級委員・あまゆみ雨弓来禾の真の目的とは……？

イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



ア ス ト ラ コ ル リ ア ン ズ

兄は指揮官に妹は銃殺刑に

小さな島国ネイザーラントで
ある日突然内戦勃発!
反抗勢力に勝つにつき、
政府転覆大成功!!
しかし……
敗北した旧政府の残党は
新政府の女王を果敢に拉致!
これにより一発逆転を目論むが……

新政府軍の警備兵である兄と
旧政府軍の首謀者である妹。
ふたりの自己都合が工作する
陰謀豊かなお手軽コメディ!?

テロリスト
反逆者
プリンセス
迫り来る反逆者
担がれる民間人
そして…アホの子
掻き乱す問題児!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/01/>

生き別れた友を探して旅に出たリュウカ。
世界のために魔術の研究に努めるクロエ。
愛する人を追ってすべてを捨てたアカネ。
一方……
魔物たちによる侵攻は苛烈を極めていく。

見知らぬ世界で彼女らは生き延び、
そして、
帰郷への道標はあの場所に——!?

空色書房

Sleeping under the sky